三歳児とともに

桜林　早苗

三歳児のこの一年の生活を振り返ってみると、その生活の中心は「遊び」であったと言っても過言ではないでしょう。

家庭のなかで温かく保護されていた生活から、突然同年齢の全く知らない者のなかで幼稚園生活を始める――そのことだけでも、子どもたちにとって、どんなに大変な変化だったことでしょう。

入園当初、そこには、いろいろな反応がみられました。

朝、母親から離れられず汗びっしょりになって大声で泣くKとR。

遊具に触れていてもママを思い出すのか涙ぐむT。

ただただ保育室内を歩き回るNとR。

どこに消えてしまったのか行方不明になって年長組のお姉さんたちに「邪魔して困るんです！」と連れ戻されるA。

先生のスカートを離さず、先生が断りなしに動き出そうとすると「ダメ！」と大声を出すY。

ままごとコーナーで「ぼくおかあさまよ」と言ってガスレンジの前から動かないA。

静かに絵を描いては「先生できました」と何回も繰り返すN。

「私ができます。私がお片付けします」とやたらに頑張るK。

友だちの声がうるさいと言って泣くA等、二十人二十色でした。このひとりひとりから不安を取り除き、できる限り自分を発揮して行動できるように、その子どもの発達段階に即した対応が最も大切なことだったように思えます。ある子どもには、〝ひとり遊び〟を満足させるためにソーッとしておくことが最良であり、又、ある子どもには、友だちとのかかわりのきっかけを作ってあげることが最良の場合もあるでしょう。ひとりひとりと先生が太い絆を作りながら、一時に様々な判断をし、決断を下して行動することは、先生にとっても大変なエネルギーを必要とした頃でした。

一学期は、ひとりひとりの遊びから友だち関係が芽生え始めた頃でした。仲良くもなるが、原因不明のケンカが起こったり（口で自分の気持ちが表現できなくて手が出ることが多いので）、友だちと一緒にただただ遊具を移動させて遊ぶだけを楽しんだりしました。遊びは長続きはしませんでした。当然ひとりだけで、友だちの遊びを眺めるだけの子どももいました。

二学期は、だんだん協力することを知り、友だちと心を添わせて遊ぶグループもできてきました。二人位ずつの遊びが合体して、いろいろな遊具を目的をもって使用したり、遊

びのための道具を自分たちで作ったりもするようになってきました。（ファイブマンごっこのメガネや剣等）時として身体の大きい子どもの命令だけに動き回ることもありましたが、友だち同士の特性も認め合えるようになってきました。

三学期には、かなりグループ意識もでてきて、役割をもった「ごっこ遊び」の楽しさを味わえるようにもなってきました。かなり大勢の人数で長時間遊びが繰り広げられるようになりました。「ままごと」から「レストランごっこ」「お店やさんごっこ」へと発展したり、「ウルトラマンごっこ」から「基地作り」へと組総動員で動く日もみられるようになりました。また、なかなか友だちとなじめなかった子どもにも気の合う友だちができて、穏やかな表情で過ごせるようにもなってきました。

全て計画通りに順調に進んでいったわけではなく、山あり深〜い谷ありで、いろいろなことがありました。ただ担任として大切にしてきたことは、どんな小さなことでも初めての経験は、先生も子どもも「楽しかった」「またやりたいナ」という気持ちで終わらせたいと思い、心がけてきました。

六月になって、暑い日が続き、砂場遊びで水を使うことも多くなりました。水道の蛇口をひねって、バケツに水を入れ、そのバケツを砂場に運ぶことは、三歳児にとっては大事業なのです。バケツに水が入りすぎて持ち上がらなかったり、やっと上手に運んで砂場に到着した途端に、足元にジャーとこぼしてしまったり等、努力の割りには成果は少なく、くつ、くつ下、洋服ばかりビショビショになって水遊びの楽しさには程遠いものでした。なんとかして水遊びの楽しさを経験させ

たいと思い、園庭の池を大掃除して水が流れるようにしました。（実習生の若い力があったから一日で掃除が完了しましたが、大変なエネルギーを消費しました）

先生も一緒に楽しむには、みんなが上手に遊べるにはと、細かい所まで大人の配慮すべきところを三歳の先生同士確認をして、子どもたちを待ちました。その日は朝から暑かったので、子どもたちはワクワクしながら、そして少しコワゴワ初めての経験を楽しみ始めました。ところが、年中組の子どもたち数人が、アッという間に庭の砂利や土を投げ入れたり、くつのままバシャバシャ池の中を走り回りました。池の水はすぐ泥水になってしまって、水遊びを楽しむ気持ちも萎んでしまい、早々、みんな水から上がってしまいました。次の日から雨が降ったり、涼しかったりで、水遊びは尻つぼみになってしまいました。大人の配慮がもっと行き渡っていたならば、池での水遊びも楽しい経験で終えることができたでしょうに、残念な経験でした。この経験があったから、子どもたちに楽しさを残して終わりたいと、なおさら痛感したのです。

又今度やる、今度すれば良いというのではなく、子どもたちにとっては、その時、その時が、ただ一度の貴重な経験なのです。幼稚園の生活はその経験の積み重ねではないでしょうか。

自由に遊んでいるから、それで良いというのではなく、一瞬一瞬が貴重な時なのだという自覚をもって過ごさなければいけないと、この一年三歳児との生活から学んだような気がします。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）